

汲古一心

「書道随想」(一)

手前味噌の臭さ、我田引水の可笑しさ、ともにあんまり褒めたものではない。が、天下いかなる人の話でも、手前味噌の臭気の全然ないものがあつたら、せいっはちよつと珍とするに足るものである。とまア、最初から味噌の駄目を押してかかるんだから、中味は最早知れたものだろう。

もう大部以前に、宿願の正倉院の御物を拝観して、その奈良朝工芸品の精巧さに驚異の眼を瞠つたよりも、さらに私を驚かしました考えさせたものは、何といつてもあの御物宝蔵には珍しい一葉の農民の借金証文だった。

「なアーに、そんなものにすぐ眼がつくのは君が年中貧乏しているからだヨ……」と私の友人達には、「正倉院へ行つてもあの男は一番先きに、借金の証文を見つけて感心していたとか」と方々から野次られたりはしたが、実際さこぶる良い研究資料になった。それは今年の秋に自分の田に出来る米を抵当にして、銭何貫文かを借りるといふ春の日附のものであつて、ところどころに誤字誤文もあるように思われたが、その字はまずもつて拙いものだった。しかしそれでも、あの時代の農民に、ああいうものが果たして書けたかどうか、これも随分疑わしいものだ。勝手な想像ではあるが、おそらく庄屋といつたような地位のものか、あるいは地方官に隸属する人などの代筆ではないかと思われる。どつちにしても、決して教養の高い人達の書いたものではあるまいと見たのであるが、ただこの拙いと見えた筆蹟の中にもその時代の匂い、精神といったものは、歴然と看取することが出来た。あの唐の模倣に全力を挙げて、政治といわず、宗教といわず、帝都の設計から官民の服装に至るまで、ことごとくが唐制輸入の影響でないものはなかったといわれている時代のことだ。文化の伝播に最大な力をもつ書道が、この埒外にあらう筈は素よりあり得ないことで、この時代の書物類の中おそれ多い書物は別として、他の筆蹟のいく多の国宝類に徴しても、ひとつとしてこの文

化輸入時代の滔々たる傾向を、物語っていないものはないのである。

実にこの一片の民衆の証文にも、また唐人の書風の特徴が著しいまでに拙いながら流れていた。しかしまた同時に、金銭を借りようというような窮迫な境涯とは思われないほど、暢やかな温雅なものが、匂い出てもいた。これがたとえ代筆にしても、全く時代精神の反映であるといふことは、何人も否み難いであろうと思ふ。

また、私どもが能く習字の手本として見かける弘法大師の風信帖という、伝教大師に宛てた手紙がある。これを伝教大師の書いた久隔帖という書翰などと較べると、実におもしろい両者の対照を見るのである。あの信仰と相俟つた深い信念とそして素晴らしい実行力とをもつて天下にあまねく法灯を輝かした空海上人の暢達した力強い、そしてどことなく派手に人目を惹くあの筆蹟の数々と、叡山の頂に籠つて静かに山気を呼吸して法類の修行に専念したらしい最澄上人の蕭散たる筆蹟とは、よく両聖の性格の相違を物語るばかりでなく、何かこの両宗派にも、一脈この気分が流れているようにさえ感ぜられるのである。

しかしこの両聖筆翰の中に共通するものは、高く深い崇めらるべき人格の尊さと先覚者のもつ堅い信念の閃きと、やはりこの時代の精神的傾向を感じしむる、あるものの匂いなどである。(つづく)

「筆間雜記」中村素堂随筆集昭和六十三年刊より転載。

